

環境学委員会 環境思想・環境教育分科会
環境教育の思想的アプローチ検討小委員会（第24期・第3回）
議事要旨

日時：令和元年7月4日（木）14:00～16:15

会場：日本学術会議5階 5-C（1）会議室

出席者：安藤聡彦、岡野隆宏、金子祥之、重藤さわ子、高田知紀、豊田知世、豊田光世、
二宮咲子、横山隆一、吉永明弘（敬称略・五十音順）

欠席者：原子栄一郎、河野通治（敬称略・五十音順）

オブザーバ：伊藤悟、氷見山幸男、関礼子（敬称略・五十音順）

議 題

1. 趣旨説明およびメンバー紹介

安藤委員長より、本日の委員会に関する趣旨説明があった。また、今回が初参加となる二宮委員より、自己紹介いただいた。

2. 議題：「地図と環境教育」に関する研究紹介

横山委員より、資料に基づき「地図と環境教育、自然保護教育」と題する報告があった。

吉永委員より、資料に基づき「環境倫理学とアメニティマップ」と題する報告があった。

3. 質疑応答

横山委員の報告に対する主な議論は以下のとおり

- ・地図の複数性：大きく、数学的な規則性にもとづき客観的な事実を表す「地図」と、主観的に強調して表現する地図（「絵図」）がある。
- ・「地図」から対話へ：報告では多く「地図」が紹介されたが、それが合意形成にどのように活用できるかが議論となった。自然保護と開発では、意見が対立しがちだが、地図上にまとめることでお互いの主張や価値観の違いを認識できる。対立しているという事実を示したうえで、何をいかに進めるのか議論のためのツールとなる。
- ・環境地図教育研究会（<http://www.environmentalmap.org/>）：子供たちが独自の視点から地図を作成する作品展（環境地図作品展）があることが紹介された。

吉永委員の報告に対する主な議論は以下の通り：

- ・政策や実践（action）への応用可能性：公園のアメニティマップ作りの事例では、利用者と行政と公園管理者の三者で公園利用のワークショップ開催。（行政を含む）異なる立場の人が参加する場で、政策へ介入できる可能性が示された。
- ・マップ作りを通じた価値形成：マップ作りを通じて、個人的な価値が可視化される（ア

メニティ／ディスアメニティの判断)。また身近な環境や地域資源に、関心を向けるためのツールとして有効（無意識を意識化）。

- ・ 価値形成から価値転換へ：多様な意見が交錯することで、価値転換につながるのでは？ インフラなどのハード面は変わらなくても、地図作りに携わることで住む人の意識が変わり、行動にも影響する可能性がある。地図をレイヤーとして重ね合わせ、複数分野（多視点）から考察できるのでは。
- ・ 地図作り：「地図を読む」だけでなく、「地図を作る」ことが教育上重要かつ有効。

総合

- ・ 地図作りの可能性と課題：地図という表現形式は、客観的・科学的な存在であるが、地図作りという実践は、主観的なものである。そのため、マイナーなもの、好まれないもの、調べていないもの、タブーなどが排除されやすいという怖さもある。地図が覆い隠すものをどのように表現するのか。立場の違う地図を「重ねる」ことが重要。
- ・ 地図を作りから社会実践へ：地図作りから価値形成、環境形成へいかにつなぐか。また環境教育の展開、政策への応用についての検討。エシカルでありたい欧米企業が増えている。アメニティマップに、個人的な経験だけでなく、コミュニティの文脈や自然の文脈が加わった時、環境倫理的にどのような展開が考えられるか。

4. 総合議論、今後の予定等

- ・ 河野委員が民間企業へ出向するため、退任されることが報告された。後任の環境省環境教育室長も可能であれば参加されることが伝えられ、委員会としても了承された。
- ・ 2020 年度に実施する予定のシンポジウム等でのアウトプットの方向性を考えるために、もう一度研究報告会を行い、方向性を検討する。次回の研究報告会のテーマについて以下のような議論が行われた。
- ・ アクションにつなげていくための（環境思想の）価値形成の在り方
- ・ 地図も妖怪も学びや認識のツール。アクションやまちづくりの実践をおこすことも、一つのツールとしてとらえられるのでは。
- ・ 価値を可視化したり、感情の対立をマップすることで事実ベースにしたりすることは、アクションを起こすうえで重要。
- ・ アクション、アート、ツールに体现された環境思想をみる、などキーワードが出たが、次回のテーマは安藤委員長を中心に考え、メールベースで連絡。立候補形式で報告者を募ることになった。

以上